対　　談

“片意地張らずにまずは本に触れてみる。「かなぼん」実行委員・安田さんにいろいろ聞いてみた。”

神奈川本大賞とは？

昨年２０１４年から始まった、神奈川県民みんなで決める本の大賞。本とそれに対する思い(コメント)を県民から募集し、ノミネート作への投票によって大賞を決める。参加書店、図書館、他店舗店頭での投票に限られ、同年９月に第一回の授賞式が行われた。

//

安田有希さんプロフィール

紀伊國屋書店横浜みなとみらい店勤務。文芸・芸術書を担当し2010年開店時からのスタッフでもある。神奈川本大賞実行委員。

・・

大盛堂・山本（以下Ｔ）まず最初に、神奈川本大賞の成り立ちから教えてください。

紀伊國屋・安田（以下Ｙ）成り立ち、というほど大層でもないんですが、きっかけは「書評家や書店員など決められた人だけじゃなく、みんなで作る賞があってもいいんじゃないか」と思ったことからですかね。元々わたしがあんまり文学賞だとかに詳しくないのもあるんですけど、「(有名な)○○先生推薦！」とか帯に書いてあるより、「友だちの○○ちゃんが面白いって言ってたー」って本の方が読みたくなったりとか。そういう気持ちをもっと大きくできないかなと思ったのが最初です。

Ｔ 普段着みたいな感じですかね。あと他県単位の書店を中心とした賞では、例えば販売数や金額を公表してというのもありますが、「神奈川本大賞」の設立時にはそういった考えは無かったということでしょうか？

Ｙ そうですね、書店員としては「売りたい」って思いももちろんありますけど、それよりも本に触れたり本のことを考えたりするきっかけを増やしたい、って方が大きかったですね。 また、本をきっかけに「神奈川県のみんな」って身の回りの人を意識してほしかったのもあります。

Ｔ そういえば略称というか愛称も「かなぼん」でしたね（笑）親しみやすいというか。

Ｙ なんでひらがな、なんでしょうね（笑）親しみやすいといいなあ～。…先程の「数字」がメインじゃない、という話なんですが、それもあるけれど書店だけの賞じゃなく、いつかは街全体で関わっていけるものになればな、と思っています。 書店と図書館はもちろんだけど、それこそ商店街の八百屋さんにも投票箱が置いてあるとか。将来の野望は、電車の中で乗り合わせた人が「今年の神奈川本、何に投票した～？」って友達と話してくれてるのを聞くことなんで(笑)そういう風に、人とつながるきっかけに本がなれればいいなあと。

Ｔ 確かに書店だけでなく図書館にも投票箱というのは個人的には不意打ちでした。あまり現場だけの目線では思いつかないですよね。では、次に昨年度の進行状況について教えてください。

Ｙ まず他の賞と大きく違うのは、「本を推す」投票であるのと同時に「推す思い(コメント)」で選ぶ賞だということです。 その、本とコメントの投票を１次投票として３月10日からひと月募集し、その中から神奈川に縁のある選考委員の方 10名に選んでいただいた 10作をノミネート作として再度県民投票を６月25日から再度県民投票を３週間ほど行いました。そしてその最終投票の得票数トップが、神奈川本大賞として９月13日に発表になりました。ネット投票はなしでリアル投票にこだわったので、投票箱からの投票用紙回収（全参加店舗・図書館分)などが大変でしたねぇ…。

Ｔ 選考委員も多種多彩ですね。

Ｙ 神奈川本大賞を作りたい、という活動をしていくうちに「神奈川県で地元に根差してがんばっている人たちを知ってほしい」という思いも出てきて、最終的にはすごくご当地感あふれる人選になったんじゃないかと思います。かき氷屋さんあり、養豚業者さんあり、サッカー選手あり…。神奈川って広いなあ…って(笑) 選考委員もお願いしている作家・コピーライターの川上徹也さんに紹介いただいたりもしました。神奈川本のことを聞いて興味を持ってくださった方に新しいつながりを紹介いただいたりして、本当に人と人とのつながりでできた賞です。あとさらに、プロ野球の横浜ベイスターズ選手は？崎陽軒の方や江ノ電の駅員さんとかは？みたいに夢も膨らみましたけどね(笑)

Ｔ 団体、会社ぐるみで（笑）

Ｙ 「神奈川といえばなんだろう？」と体当たりでした。

Ｔ あと例えば、……意地が悪い質問かもしれませんが、他の同じような形を持つ賞と張り合おうみたいな気持ちはありましたか？

Ｙ なにかに対しての反発、みたいなのは全くないですね。逆に、たくさんの賞があるから、こういう（少しくらい変わった）賞があってもいいよね、と考えてました。

Ｔ あ、それ分かりますね。

Ｙ 著名な選考委員の方々が選ぶ文学賞や、本のプロ(？)である書店員が読んで選ぶ本屋大賞、他の地域の本大賞にしても全て「いい本」を選ぶのに対して、神奈川本は、正直読んでなくても投票できちゃうんですよ(最終投票だけですけど）。一次投票は「これいい本だから！聞いて聞いて！」と本への熱い思いを投票に込めるんですけど、ノミネート 10作から選ぶ最終投票は、そこまでの思いはなくとも「これ面白そうだなー、読んでみたいなー」で投票できちゃう。でも最終投票に入れてくださった方も、読んでなくてもその本への誰かの熱い思いは伝わったわけだし、多少なりともその本への興味は湧きますよね。

Ｔ そして、その投票した本を読んで頂ければ、本に携わる現場にとっては嬉しいわけで。読書の入口みたいな感じですね。

Ｙ そうなんです。別に神奈川本大賞を読んでくれなくてもいいんです(笑)自分が投票した本や、そこから派生した別の本に手を伸ばしてくれても。そしてその本を次は一次投票で推してくれるとすごく素敵です(笑)

Ｔ 良い意味で枝葉の幹みたいな。

Ｙ 私自身も含め、今の時代スマホがあってゲームがあって TV があって…と楽しみの選択肢はものすごく広がってると思うんです。その選択肢のなかに、あたり前に本を並べてほしいな、と思っています。

Ｔ もちろん話には聞いていましたが、安田さんの言葉でなるほどやはり、と思うところが出てきました。ではでは、次に昨年度の「かなぼん」、安田さんと周囲の方からの感想についてお聞かせください。

Ｙ 周囲から一番言われたのは「どうして神奈川なの？横浜じゃないの？」ですかね。

Ｔ それは安田さんの勤務地からなんでしょうか? 僕も実はあまり神奈川に縁が無いもので、横浜川崎が中心みたいなざっくりとした感じを持ちがちでした。

Ｙ 「横浜」「川崎」「鎌倉」と、市としての結束が強すぎる気はします。みんな「神奈川というひとつの仲間！」っていう意識が薄いんですよね。あとは、やはり業界の方からは「面白そう」とか「(コメントを集めるという)制度がいい」とかすごく応援いただきました。けど、業界外の友人からは、コメントはハードル高い、という声もやはり。

Ｔ コメントはそうかもしれないですかね。自分の発言をネットとは別にリアルに人目にさらされるというのは、けっこう高いハードルだって、僕も知人に言われた覚えがあります。

Ｙ あと自分自身の感想としては、想像していたよりもずっと図書館や地区センターなど公共の場の方々が意欲的ですごく励みになりました。実行委員に図書館司書の方や学校司書の方がいたからこそうまくいったのもありますが、書店という営利を追う職業の書店員発信の賞に、こんなに協力いただけるとは思いませんでした。

Ｙ 図書館の方は「本」自体が大好きですよね。図書館に伺うとそう強く感じます。あと、以前当フリペで名古屋の七五書店の熊谷さんに、NSK（名古屋書店員懇親会 ＊註１参照）についての対談にご登場頂いたのですが、会は参加されている方の「人柄」が作ると言われていたのがすごい印象的で。「かなぼん」もそれにあてはまる気がします。

Ｙ そうですね、実行委員だけでなく選考委員の方々や参加店舗・図書館として名乗りを上げてくださった方々、また９月13日の受賞式で実際に投票してくださった県民の方にもお会いできたんですが、みなさん本と人が大好きで一生懸命な方ばかりでした。そういう方たちで「かなぼん」も作られていると思いますね。

Ｔ もちろん安田さんもその一翼というか中心を担っていますよね。

Ｙ わたしは単に言いだしっぺですから…(笑)ここまで大変だと思わないで、やりはじめたんですけどね…。けど、賛同くださる方が多くいてすごく嬉しかったです。一部の高校では、学校司書さんや先生が授業の一環として最終投票を取り上げてくださったりもしたんですよ。大ごとになって緊張もしますけど、すごくありがたいです。

Ｔ そして、安田さんとしてはこれからの「かなぼん」、どういった形で運営していきたいと考えていますか？

Ｙ 第１回はほんとがむしゃらで突き進みましたけど、なんだかよくわからなかったであろう神奈川本大賞に第１回から面白がって参加してくれた方、書店・図書館への感謝を胸に、第２回からは、もっともっと神奈川全体が盛り上がるように、参加者・書店・図書館・その他の増加を目指して頑張っていきます。大賞が発表された後、売れる＝街に出る、そのきっかけを作れるのは書店だけなので、できればどんな小さな本屋さんでも県内全書店で足並みをそろえて大賞を盛り上げていきたいです。街に出れば人にも会うし、また新しい本や、なにかのきっかけにも出会う、そういうチャンスになれればと思います。

Ｔ いいですね。ちなみに安田さんがご自身の写真とともに推薦帯に登場する『拝啓 山ガール様』(註２)でも、著者の深田さんは山へ登るには「片苦しい意義付けはいらない」と書かれてますね。安田さんが「かなぼん」に関わる姿勢と合い通じている感じがしました。

Ｙ や、山ガール…！帯見てくださったんですね、ありがとうございます(照)。あれも、「百名山書いたすごい人！」というイメージだった人が、下山のビールを楽しみに登ってたりするところがいいんですよ。すごく身近に感じられて。かっこつけてないんですよね。楽するために、できるだけ標高高いところまでバスだとか乗り物で行こうとするし。…そんな風に片意地張らないで、「かなぼん」も続いていけばいいなあ。そして「かなぼん」の実行委員もどんどん変わって、その時に合った新しいものにしていってほしいです。

Ｔ その上で一つのことを継続していくのがどれだけ大変か。安田さん方々のその背中を見て後進の人達が新しいアイディアを出して、色々仕掛けてほしいですよね。

Ｙ 本当に。実行委員やりたい！「かなぼん」をこうしたい！って言ってくれる方を常時絶賛募集中です！

Ｔ では最後に本年度の意気込みについて一言お願いします。

Ｙ 現在参加書店を増やす道を模索して鋭意努力中のため、第２回の開催をいつ発表できるかまだ分からない状況ですが、「県民みんなで作る神奈川本大賞」というコンセプトはそのままにがんばっていきますので、ぜひ今後ともよろしくお願いします！

Ｔ あ、あと愚問かもしれませんが、安田さんにとって「かなぼん」とは？

Ｙ 難しい質問ですね・・・。本に対するわたしなりの答え、かな？

Ｔ ありがとうございます！これからの「かなぼん」が神奈川だけではなく、広く全国に知られていくのを楽しみにしています。

・・

註１･･･「名古屋書店員懇親会」の略。２０１０年１２月創立。定期的に行われる書店員、小説家、出版関係者との会合を主に活動している。今年６月の会合で２２回を数え、書店関連のイベントにおいて全国でも著名な会となっている。熊谷さんが幹事役として活躍している。

註２･･･『拝啓 山ガール様　深田久弥作品集』(廣済堂文庫)『日本百名山』の著者として知られる深田久弥の山関係エッセイのアンソロジー。当文庫の帯に登山が趣味である安田さんの推薦文＋ご自身の写真が掲載されている。

大盛堂書店 2F通信

Vol.47

今号では「神奈川本大賞」実行委員である紀伊國屋書店横浜みなとみらい店・安田有希さんにご登場頂きました。ご一読を。

(2本)

大盛堂書店
東京都渋谷区宇田川町22-1

猿のでどころ

第24回　景文館書店・荻野

「二〇代の終わりころ、瀧井孝作氏を訪問すると二、三百枚の本郷松
「二〇代の終わりころ、瀧井孝作氏を訪問すると二、三百枚の本郷松
屋製の原稿用紙を私の前に置いて「これに小説を書いてみよ」と云われたことがあった。そして「小説というものは、自分のことをありのままに、少しも歪めず書けばそれでよい。嘘なんか必要ない」と云われた。私は有難いと思ったが、もちろん書かなかった。そのころの私には、書くべき「自分」などどこにもなかったから、書きようがなかったのである。」これは藤枝静男の小説「空気頭」の冒頭です。このあと、どこまでホントかウソかわからないような、肺を患った妻の療養生活が描かれます。でも、本編が始まる前の2ページくらいの方が好きでここを何回も読んでます。で、ここを読むとさらに思い出す本が2冊あって、一つは村上春樹『螢・納屋を焼く・その他の短編』（新潮文庫）。思い出すのは「螢」の中の次の文章。「僕はいつも本を読んでいたので、みんなは僕が小説家になりたがっているのだと思っていたが、僕は小説家になんかなりたくはなかった。何にもなりたくなかった。」もう1冊思い出すのは『ライ麦畑でつかまえて』（白水Uブックス、野崎孝訳）。こっちは、特定の箇所を思い出すというのではないですが。何が好きかってまず「ああ、こんなに率直な言い方があるんだな」って気になるとこですかね。自分の言いたいことが正確に表現できると快感なんだな、というか。シンプルなことですけど、自分の中の「ある気分」について、自分よりも他人が書いた小説の中の「ある言葉」の方がよりよく言い表しているとき、僕はけっこう快感です。今思ったんですけど、小中学校の夏休みの読書感想文ってべつに単一の本の感想じゃなくて、「読書するということ」についての感想をまじえたり、複数の本を読んでひっくるめてひとつの読書感想文を書いたっていいですよね。ちょっとトリッキーだし、その年齢の時の僕にはそういう発想はなかったけど。子供がいたらそう提案してみようかな。